

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティー

— 文化団体ナックスの活動とその自己認識 —

岩 田 晋 典

キーワード

多文化主義、植民地主義、スリナム、黒人、奴隷解放記念日、エスニシティ

はじめに

毎年七月一日は、奴隷解放・奴隷制廃止を祝うスリナム共和国の祝日、「ケティコティの日 *Keitiko-Dei*」である。「ケティコティ」とは、スラナン語——奴隷制の中で生まれたスリナム固有のクレオール英語——で「鎖 (Ketj) の切断 (Kotj)」すなわち奴隷の解放や奴隷制の廃止を意味する⁽¹⁾。

今日スラナン語は、スリナム社会全体の共通語になっているが、それと同時に「アフリカ系スリナム文化」のシンボルでもある。このことは、一九五九年に七月一日が祝日に制定されたときのオランダ語名「自由の日 *Dag der*

Vrijheden」が、一九九三年に黒人文化団体の圧力でスラナン語名「ケティコティの日」に変えられたことにも現れている [Breureld 2000, pp. 472]。

スリナム社会で生きる奴隷の子孫たち——本論で「黒人」と呼ぶ人々——は、「*blaka sma/de zuarte* (黒人)」、「*criolo / creool* (クレオール)」、「*afro-sranan sma/afro-surinamer* (アフリカ系スリナム人)」、もしくは「*nengre/neger* (ニグロ)」などと呼ばれ、スリナム共和国総人口約四〇万人の四割ほどを占めるといわれている⁽²⁾。スリナムの人口統計などで用いられるように、黒人には下位分類的な区別——たとえば「クレオール」と「マルーン」——があ

る。後述するように、この区別は「黒人」というまとまり方、そして黒人の社会的在り方と深く関連している。

アフリカ人奴隷の子孫である黒人にとって奴隷制が廃止された七月一日が重要であるのは至極当然なことである。「ケティコティの日」には、公的私的を問わず、さまざまな形で奴隷制廃止・奴隷解放が祝われる。この日、首都パラマリボの街は、「アフリカ系スリナム人」の伝統衣装とされるドレス「*Kotoko*」や頭巾「*Anisangasa*」を身に付けた女性（*Kotomisiyikoto-nisi*と呼ばれる）たちで溢れ、人ごみの中には、わずかではあるが、アフリカ風の衣服を着た男性も見られる。アフリカ的な男性服は、ワイシャツなどの洋服とともに、晴れ着として好まれている。通りに氷ジュース売りや、駄菓子売りが並び、カセコ *Kascho* やカウイナ *Kawina* というスリナムの黒人音楽の路上コンサートが人々を踊りに誘う。また、コンサート、パーティー、水泳大会、バーゲンセールなど、奴隷制という過去や黒人の文化とは直接的な関係がないようなイベントも少なくない。

しかし、「ケティコティの日」をめぐる繰り返される言説に注目すると、この日が単なる祝祭の日なのではないことが分かる。新聞では、奴隷制廃止から一〇〇年以上経過しているにもかかわらず、黒人がいまだに奴隷のような存在であると主張されたり、奴隷制に対する宗主国オラン

ダの責任が議論されたりする。「ケティコティの日」には、黒人が今日置かれている（と黒人自らが考えている）状況が問題になっているのである。

本稿は、黒人文化団体ナックス *NAKS* が毎年ケティコティの日に組織するイベント「タクタンギ *Tak Tangi*」に焦点を当て、黒人の自己認識について論じることを目的にしている。ナックスの活動やタクタンギに関する研究は、日本語はおろかオランダ語においてもほとんどなされていないが、ナックスはスリナムの黒人文化団体の中でもとりわけ活発に活動している団体であり、黒人の主体的・意図的な文化活動を理解するうえで無視できない存在である。

ナックスの活動からは、黒人の現実態を「奴隷のような存在」として植民地主義的に捉え、それを克服する理想的自己像として「アフリカ系スリナム人」という多文化主義的な同一性が提示されることが分かる。このことは、その他ほとんどの黒人文化団体が唱える基本的な主張にも当てはまる。「アフリカ系スリナム人」という同一性は、スリナム社会でフォーマルなもの、あるいは「政治的に正しい」ものとして受け入れられているのである。インド人やジャワ人、中国人というように、その他の民族もまず第一に、スリナムに来る前の出身地域ごとにまとめられる。しかし、こうした多文化主義的な同一性が植民地主義との関係の中

に置かれていることが忘れられるのであれば、「ケティコティの日」に現われる黒人の自己認識の複雑性が十分に理解できない。今日「系人」という同一性が、日常的にも学術分野においても、ほとんど無反省的に用いられている状況において、本稿でなされる考察がなんらかの議論を促すことになれば幸いである。

以下では、第一にナックスの組織について説明する。次に、ナックスが二〇〇〇年の「ケティコティの日」に開催した「タクタンギ」について報告し、最後に、そこに見られる黒人の自己認識について分析を試みたい。

一、ナックスNAKS活動

黒人の文化団体は少なくないが、全てが常時活動しているわけではない。ほとんどのものは、「ケティコティの日」や独立記念日以外の時期に事実上の活動休止状態に入る。それとは対照的に、ナックスは、黒人文化の学習コースを運営するなど、さまざまな催しを定期的に開催している。

パラマリボ市街南部には黒人が多く住む地域がある。ナックスの歴史は、その地域の住民が「Tot Ons Plezier（我々の楽しみのため）」というサッカーチームを結成した一九四七年に始まる。その後すぐに「ナックス N. A. K. S. (Na

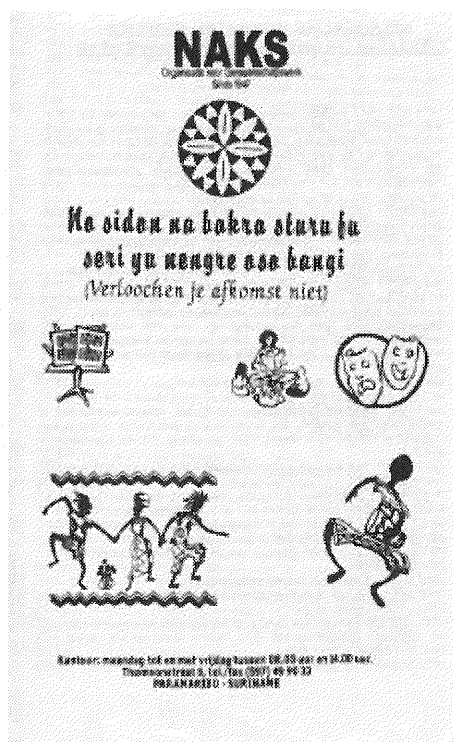
Arbeid Komt Sport 仕事の後はスポーツが来る)」と改名した。ナックスの参加メンバーの多くが黒人だったために、活動内容も、娯楽だけではなく、黒人に関する演劇や黒人音楽演奏へと徐々に拡大していった。

今日では「コミュニティ活動組織ナックスNAKS: *Organizatie voor Gemeenschapswerk*」と名乗り、「アフリカ系スリナム人」の自意識・自尊心を高めること、そしてそのために当該文化の実践を進めることを目的にしている(NAKS *Organizatie voor Gemeenschapswerk* 2001)。ナックスのパンフレットの表紙には(図1)、「白人の椅子に座ってニグロの座椅子を売るな *no sidon na bakra stunu fu seri yu nengre oso bangi*」というオドオド(スラングのことわざ)が書かれている。その下には、そのオランダ語の意訳「あなたの出自／由来を否認してはいけない *verloochen je afkomst niet!*」が加えられている。黒人文化の中で座椅子*bangi*は、単なる家具以上の意味を持つために、ここでは黒人の「起源」や「伝統文化」の象徴となっている。

「アフリカ系スリナム人」には、先に触れた黒人の下位的範疇、つまりクレオールとマルーンが含まれる。両者にはさまざまな名称が用いられるが、その差異は、前者が都市やプランテーションという植民地秩序の中で生きてきた

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティー（岩田）

図1 ナックスのパンフレット（上部にナックスのマークがある）



ナックスには、緑色の地に白色のマークを描いた旗があり、イベントが行なわれる際にはステージなどの目立つ場所に掲げられる。ナックスの理事長の話によれば、このマークは「マルーンによる花の文様」であり、白は「純潔性 *onschuld*」と「純粋性 *reinheid*」を、緑は「希望 *hoop*」と「豊饒性 *vruchtbaarheid*」を、さらに全体として「アフリカ系スリナム人という一体性の内部の多様性」を表わしているという。

「*verscheidenheid in eenheid*（統一の中の多様性）」は、スリナム共和国の国是「多様性の中の統一 *eenheid in verscheidenheid*」をちようどひっくり返したものである。国是の場合、まず「多様性（各民族）」が存在し、つづいてその中に「統一（スリナム人）」が見出される。それに対して、ナックスのものでは、第一に「統一（アフリカ系スリナム人）」が存在していて、その中に「多様性（クレオール、マルーン、あるいはマルーンの各下位集団）」が含まれている。

ナックスの運営は理事会（定員七人）、諮問委員会（定員五人）、書記局（定員二人）からなる。諮問委員会には、大学教授など、ナックス以外のメンバーも参加できる。現在

奴隷の子孫であり、それに対して後者がプランテーションから逃げ出してジャングルで共同体を確立した元奴隷の子孫だという点にある。そのため両者にはそれぞれ、近代Ⅱ西洋Ⅱ文明Ⅱ洗練Ⅱ都会Ⅱ混交／混血といった属性と、伝統ⅡアフリカⅡ未開Ⅱ野蛮ⅡジャングルⅡ純粹／純血といった属性が対照的に付与されている。

の理事長はすでに一九九六年から当職を務めている。

ナックスのメンバーになるには、入会費（二〇〇一年の入会費は当時のレートで五〇〇円ほど）を払いさえすればいいという。理事長の表現を借りれば、誰でもインド料理屋でインド料理を食べることができると同じである。ただし会員となることは同時に何らかの活動に参加することを意味するので、入会費のほかに必要経費やコースの受講料（二〇〇〇〜二〇〇〇円程度）などがかることになる。

ナックスの活動は、主に常設の六部門とその他の活動で構成されている。常設部門には、青少年部門[Jugend/Jongerenカウイナ／ドロンKawina／Dron（黒人音楽の一ジャンルであるカウイナの学習・発表を専門にする部門）、歌と踊り部門[Zang & Dans、アクバAkuba（コトやアニサを作成・発表する女性専用の部門）、年長者部門Seniorburgers、そして演劇教室[Theaterschool]がある。その他の活動には、不定期に行なわれる講演会やワークショップ、本稿で論じるタクタンギと、フアッションショー「プロド・スピクリProdo Spikiri」が含まれる。

参加者のほとんどは、運営メンバーをのぞけば、五歳前後から二〇代半ばまでの若年層であり、総勢約三〇〇人に上るといふ。ナックスは、文化活動によってこうした若年層の自意識が高まり、さらに、それが社会自体の発展に結

びついていくと考えており、したがって、こうした意味で自分たちの活動を社会への貢献と捉えている。

二、タクタンギ

〈タクタンギの概要〉

タクタンギ[Tak Tangi]は、スラナン語で「感謝(tangi)を述べること(taki)」を意味する。感謝を述べる対象は、最高神やウィンティwintiと呼ばれる精霊、そして祖先（の霊）である。

こうした黒人の宗教・観念体系は奴隷時代から黒人の間で継承されてきたもので、「ウィンティ信仰winti religi」や「ウィンティ文化winti kulturu」と呼ばれている。黒人のほとんどが自らを「キリスト教徒」としているが、そのうちの多くが、多かれ少なかれウィンティ信仰も実践している。「ウィンティ」——元来スラナン語で「風」を意味する——とは、アナナAnanaなどと呼ばれる最高神が人間を幸福にするために創造した精霊である。ウィンティと祖霊yorkaが区別されないことも多い。

人間がなんらかの不幸や病いに遭った場合、人間は、ウィンティの力を借りて、つまりウィンティによる憑依を通じて問題の解決を試みることになる。特定の音楽を通じて人

間がウインティに憑依される儀礼こそ、この信仰の特徴として最もよく知られるものである。かつては、キリスト教伝道団によって、「偶像崇拜*afgodij*」として批判された。

このオランダ語は「アフコドレイ*afkodoree*」というスラン語にもなっており、ウインティ信仰を「アフリカ系スリナム文化」として認知させることは、今日黒人文化団体が取り組むテーマの一つになっている。

さて、タクタンギで感謝の対象となる祖先はアフリカに住んでいた人々ではなく、後述するように、奴隷、つまりアフリカから分断された人々を指す。タクタンギとは、奴隷であった祖先——奴隷制という暴力を生き抜いて子孫を残してくれた祖先——への感謝祭だといえる。

ただし、タクタンギの目的はそれだけではない。祖先への感謝を述べることを通じて「アフリカ系スリナム人」としての自意識を高めること、肯定的な自我像を獲得することも大きな主題となっている。タクタンギでは、こうした主題が、祈り、特別ゲストによるスピーチ、その前後や合間になされる歌などのパフォーマンスを通して表現される。全体を通して、使用言語は基本的にスラン語である。

スラン語という言葉そのものもウインティ信仰と同じ状況下にある。植民地社会において「劣ったことば」や「壊れた英語」といった低い評価を受け、子供にはなるべくオ

ランダ語しか話させない親は、今日でも黒人の間でさえ少なくない。タクタンギでスラン語が用いられるのは、「自分たちの文化」であるスラン語の低い位置づけを変える試みの一環でもある。

ここでは二〇〇一年に調査をした第四回タクタンギを取り上げる。ナックスは、二〇〇一年六月二九日付の朝刊紙『デ・ワール・タイド*de Ware Tijd*』、「ケティコティの日」が単なるお祭りの日というだけではなく、神と祖先に対して感謝を表わす機会でもあることを一般大衆に知らしめたいと表明している。また、タクタンギに先立ちナックスの青年部会員は、テレビ局アピンティ*Apinti*のニュース番組の中で、植民地支配の中で言語や宗教が失われたこと、そのために自らの「アイデンティティ」が省みられていないこと、自由のために闘った祖先を敬わなければならないこと、そしてそのためにタクタンギを行なうことを語っている。

タクタンギは一九九七年以来毎年、大統領府からすぐ近くのスリナム博物館（歴史的建造物フォート・ゼーランドイ*Fort Zeelandia*）の中庭で行なわれる。聴衆の多くは女性であり、会場は伝統衣装コトミスイで彩られる。

タクタンギは、ナックスのメンバーである青年男女二名による司会のもと、開会の挨拶、国歌斉唱、神や祖霊を称

表 二〇〇一年のタクタンギの次第

順番	項目	内容
1	開会のことば。	
2	スリナム共和国国歌斉唱。	スリナム社会に関するもの(以下C)
3	最高神を称える歌の斉唱。	最高神などに関するもの(以下A)
4	祖先に対する祭神。	祖先(奴隷)に関するもの(以下B)
5	ナックスメンバーによる、大地の神を称える歌の斉唱。	A/ナックスによるもの(以下#)
6	大地の神を称える歌の斉唱。	A
7	ナックスメンバーによる詩の朗読。	現代の黒人の文化に関するもの/ #
8	スピーチを行なうゲスト、ブレイフェルド氏の表彰。	
9	スピーチに関する短い説明。	
10	祖霊に訴える歌の斉唱。	A
11	奴隷制廃止を目前に控えた奴隷に関する歌と踊り。	B#
12	最高神に平和を祈る歌の斉唱。	A
13	スリナム社会の結束を訴える歌の斉唱。	C
14	ブレイフェルド氏によるスピーチ。	
15	最高神に祈る歌の斉唱。	A
16	ナックスメンバーによる詩の朗読。	C#
17	スリナム社会の団結を歌う歌の斉唱。	C
18	ブレイフェルド氏の主導による祈り。	A
19	收穫を歌う民謡(マルーンの一言語が用いられる)の斉唱。	B
20	ナックス理事長による閉会のスピーチ。	

えるさまざまな歌や詩の朗読などのパフォーマンス(聴衆が参加するものも含む)、メインとなるゲストによるスピーチ、その人物が主導する祈り、そして、ナックス理事長による閉会のスピーチから構成されている(表)。全体の長さは二時間ほどである。

タクタンギには、毎年異なるテーマが選ばれる。テーマは、理事会とゲストが話し合って決める。二〇〇一年のテーマは、『あなたの道の主はあなた自身である(yu na basi fyu eygi pasi)』というものであった。ゲストによるスピーチはこのテーマに関するものであり、タクタンギの次第の中心を占める。二〇〇一年のゲストは、スリナム・アントン・デコム大学教授H・ブレイフェルドBreeveld氏である。以下、開会と閉会の挨拶、いくつかのパフォーマンス、そしてブレイフェルド氏によるスピーチを例に引いて、タクタンギの内容を詳しく見ることにする(各数字は、表の順番を示す)。

〈開会と閉会の挨拶〉

「開会の言葉」(1)には、ナックスの活動スタンス、タクタンギの意味が簡潔に表現されている。^⑩

今日我々は、我々の大いなる祖先が奴隷制を打ち破った日を思い出すのです。

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティー（岩田）

我々ナックスはタクタンギをする日を始めるために、ある慣例のようなものをこれから行ないます。

大いなる神への祈り方をあらゆる人々が持つように、我々黒い肌を持つ者にも素晴らしいやり方があります。尊敬の念と信心を我々が抱いていることを大地に示しましょう。

さまざまな「祈り方」のうちの一つとして「我々黒い肌を持つ者」のやり方——最高神を称える歌（3）と黙祷（4）——があるということには、黒人とその文化がスリナムという一国家を構成する多民族・文化の一つとして存在するという多文化主義的な位置づけが込められている。その直前に、多民族間の協同が謳われる国歌斉唱（2）が置かれていることから、それが分かる。

タクタンギの最後には理事長によって「閉会の言葉」（20）が述べられる。理事長は、タクタンギに参加した人々に謝辞を述べたあと、若者の成長を助ける大切さを強調すると同時に若者を激励し、最後に以下の詩で「閉会の言葉」を締めくくった。

黒い肌（の者）に、自らが持つ知識について多くのことを知ってほしい

他の人々にとってこうしたことは助言にちがいない
しかし黒い肌を持つ者にとってそれ自体一つの知識である

にちがいない

多くの者が私の文化を異端と呼ぶ

なぜならその名は「文化のブレイ（ウインティ信仰の儀礼）」だから

奴隷制の時代に白い肌（の者）は我々の祖先に教えた
我々の文化に良いものは何もないと

だからこそニグロはかれらの文化のためにもっと頑張らなければならぬ

他の全ての人々は自らの文化を發展させている

ニグロの文化だけが後退している

いつ我々は侮蔑的な生活を終えることができるのか

我々は自らの文化を發展させなければならない

人は文化を良くすれば、文化は彼を良くもする

人は文化を軽蔑すれば、それはあとで返ってくるのだ

「黒い肌を持つ者」の文化が、「白人」の価値観によって蔑まれていること、しかし「黒い肌を持つ者」はそれについて知識を深めなければならないこと、そして文化をさらに發展させなくてはならないこと、これらのことは、後述するブレイフェルド氏のスピーチの中でも繰り返される。スラナン語を用いることや、伝統的な歌・音楽・踊りを演じることは、文化の理解と發展を実際に試みることであり、その機会としてタクタンギがある。自己の否定視を克服す

るために、祖先を評価し、そして多文化主義的な自己像を提示するという一連の営為は、タクタンギの中で一貫している。

△パフォーマンス▽

タクタンギで行なわれるパフォーマンスは、最高神やウインティに関するもの、祖先（奴隷）に関するもの、現代の黒人とその文化に関するもの、スリナム社会に関するものの四種に分けることができる。

(i) 最高神やウインティに関するもの

最高神を指す名称は、すでに述べたアナナのほかに、ガド Gado（キリスト教の神に対しても用いられる）、ケドウ アマン Keduaman、ケドウアンボ Keduampō、ウイタタ Wiatata（元は「我々の父／祖先」の意）がある。歌（15）は、奴隷によるアナナへの祈りを歌ったものである。

私たちはアナナに祈る

ケドウアマンとケドウアンボよ

ひざまずき頭を上げて

感謝すればよくなる

私たちはアナナに祈る

ケドウアマンとケドウアンボよ
アナナよ、私たちを助け給え
私たちはあなたをたたえて歌う
感謝を言う何千回も
私たちはアナナに祈る

長い鞭が背中に
たくさん汗が滴り落ちる
血が染みを作る
一息つくために歌を歌おう
私たちはアナナに祈る

ウインティ信仰において、最高神の他に重要な位置にあるのが大地のウインティ、アイサ Aisa である。アイサは、マナイサ Manaisa、メイサ Maisa、ワナイサ Wanaisa ともいう。歌（6）では、アイサとアナナが称えられている。

大地から糧を得る子供たちが大地に祈りに来る、ワナイサよ
大地から糧を得る子供たちがアナナに祈りに来る、ウイタタよ

(ii) 祖先（奴隷）に関するもの

ウインティ信仰に祖霊信仰の性格があることからすれば、祖先に関するパフォーマンスを（i）に加えてもいいかも

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティー (岩田)

れないが、パフォーマンスの対象となるものが神や精霊ではなく人間（奴隷）であること——（i）のように祈りが主題となるのではないこと——から、ここでは祖先（奴隷）に関するものを独立させている。ナックスによるパフォーマンス（11）は、奴隷制の廃止を前日に控えた奴隷を、少年少女が豊かな振り付けで歌うものである。

奴隷のニグロ、もう聞いたかい

七月一日はケティコティだ

おまえたち男の子はカミサkamisa（腰布）を身につけ

おまえたち女の子はパニpangi（体に巻く布）を巻く

レ、レ、レパムレ（掛け声）

奴隷制は私たちの祖先の息の根を止めてきた

奴隷制はもうお終いだ

私たちに明日が残った

命令だ、ウオイ、ウオイ、命令だ

見張り番に鞭打たれる（繰り返し）

鞭で打たれるということばの繰り返しで終わっていることが示すように、ここでは奴隷制が終わる嬉しさだけが歌われているのではない。

(iii) 現代の黒人とその文化に関するもの

ナックスの活動に対して大きな影響を与えた人物に、J・G・A・クーンダース Koenders（一八八六—一九五七）がいる。クーンダースは、黒人を劣った者とみなす植民地主義的な黒人像を克服する目的で、一九四〇年代から一九五〇年代にかけてスラン語を用いた月刊誌や本を発行した人物であり、(iii)では彼の詩『私たちの言葉 Wi Tongol』（一九四七年）が朗読される（7）。

スラン、私たちはあなたを心から愛している

あなたのような美しいことばがほかにあるうか？

あなたこそ私が欲しいもの

なぜならあなたはスランだから

私たち自身のもの

自分たちが話すことばを、あえて「美しいことば」、「私たち自身のもの」と強調しなくてはならないことが、スラン語の位置づけを物語っている。

(iv) スリナム社会に関するもの

スリナム社会に関するものは全て団結を訴えるものである。この主題は、大衆音楽にも頻繁に現われる。歌（17）ではそれが直截的に歌われている。

スリナム人よ、集まりなさい
一致団結しなさい
スリナム人よ、一つになりなさい
美しいスリナムを築くために
手を結び、一つになりなさい
愛すべき美しいスリナムを築くために
私の国よ、私は愛している
あなたはこんなにも美しいのだ

スリナム人の一致団結を謳う歌と式の冒頭の国歌は、「多くの民族から構成されるスリナム」という多文化主義的社会的像や、スリナム共和国の国是「多様性の中の統一」の追認・肯定となっているといえる。

以上、タクタンギで行なわれる各パフォーマンスを見てきた。そこでは、神や祖先、黒人文化、そしてスリナム社会という多文化主義国家が主題になっている。次に取り上げるブレイフェルド氏のスピーチを合わせて考えると、タクタンギのテーマが、祖先を尊重することⅡ自分たちの文化を尊重すること、そしてそれによって理想的な多文化主義的自己像が生まれるという考え方がタクタンギの中心にあることが分かってくる。

△ゲストによるスピーチ▽
ブレイフェルド氏のスピーチ(14)は、タクタンギのテーマ『あなたの道の主はあなた自身である』に関するものであり、全体の長さは、その説明(9)を含め、三〇分をゆうに超す。以下では、重要な部分を抜き出すだけに留めている。

スピーチに先立って、ナックスは「尊敬と荣誉」の印としてブレイフェルド氏を表彰した(8)。つづいてブレイフェルド氏がタクタンギとテーマ、そして自らのスピーチの目的について短い説明を行なった(9)。

我々は何よりもまず感謝を示すのであり、それはすなわち、みなさんがここで祖先について思い起こすことなのです。

我々は、みなさんのために祖先が行なった数多くのことに對してタクタンギを行ないます。祖先にとつてかれらの時代がどんなに酷いものであつてもかれら祖先が決して諦めなかつたことについてタクタンギを行なうのです。(中略)

みなさんの祖先は生き延びた。そして奴隷制が終わつた後、かれら祖先はその過去へ振り返ろうとしなかつた。かれらは未来を見て、自分の力で生きてきたのです。かれらはみなさんのために数多くの宝を残したのであり、だから、もしそれについてみなさんが知らないのであれば、私がみなさんにお話ししよう。

タクタンギすなわち感謝することは、祖先に付いて想起することである。また、想起する対象には、祖先が生き抜いて自由になったこと、そして祖先が残したもの、さらに残したという行為自体も含まれている。

祖先や祖先が成し遂げたことについて想起を促すのは、そういった事柄が黒人の間で日々忘れられてきているという危機をナックスやブレイフェルド氏が抱いているからである。タクタンギとはこうした危機を打開するために組織される儀礼でもある。

いくつかのパフォーマンスをはさんで、ブレイフェルド氏のスピーチが始まる。その冒頭で、タクタンギの概要とテーマ『あなたの道の主はあなた自身である』の意味が説明される。

今日はスリナムで奴隸制が終わってから一三八年目に当たる日です。しかし、我々、奴隸の子孫たちはどこにいるのでしょうか？この問いは今年だけではなく毎年出されてきたものです。

時は経過し、そして地球上のあらゆる国々から他の人々(民族)がここに来た。移住によってあらゆる地域の人々がここに来て、今日アフリカ系スリナム人はかれらと一緒に生きることを学んでいる。かれら自身もアフリカ系スリナム人と一緒に生きることを学んでいる。けれども我々は知りたい。こ

うした状況の中で我々はどこにいるのか、どのように生きているのか、そしてどこに行くのか。我々は、この問いに対して答えようとしているのです、あなたの道の主はあなた自身である。

今年のタクタンギのテーマ『あなたの道の主はあなた自身である』は、奴隸制が廃止されてから百数十年経過した今日でも解決されないでいる問題、すなわち自己についての存在論的問いに対する答えなのである。現実には「あなたの道」が「あなた」以外の誰かによって所有されている状態、いいかえれば、支配されている状態にあるために、「あなたの道」を所有するのは「あなた自身」であるということとをわざわざ改めて強調しなくてはならないのである。

そしてスピーチは再びテーマに戻り、さらに詳しい説明が加えられる。

あなたがどこに行くのかを知るためにあなた自身の道を見つける、その責任はあなたにあるのです。自分の道の主である人は、自分自身の考えなしに、自分自身の顔なしに、自分自身のやり方なしに、他の人々の後ろを付いていくことではない。これが、『あなたの道の主はあなた自身である』ということなのです。

自分の道の主であることは、日々をどのように過ごすのか、

時間をどのように過ごすのか、あなたが持っているもの、あなたの国の宝、あなたの周りにある宝をどのように使うのかについて語ることなのです。これが、『あなたの道の主はあなた自身である』ということなのです。

「自らの道の主人」になるには、自己責任を持つ必要があるという箇所、また、生活において自ら計画を立てる必要があるという箇所（時間あるいは所有物をどのように使用するのか）に注目したい。これをいいかえれば、「主人」になることは、自己責任、主体性、計画性を持つことなのである。それは、奴隷制下において奴隷が有さないと言われた特徴、あるいはそれとは逆に近代的自我が持つべきとされた性格と重なる。

ここである「宝」とは、奴隷の子孫の文化を指している。後続の部分でブレイフェルド氏は、歌手M・ナイマン(Nijman (一九四一))の音楽や、詩人トレフォッサ(Trefossa (一九一七五))の詩を例として引いて、『あなたの道の主はあなた自身である』というテーマを説明していく。ナイマンはオランダ在住のスリナム人歌手で、今日でもスリナムでコンサートを開催している。彼のレパートリーには、米国黒人音楽の影響を色濃く受けたラブソングだけではなく、スリナムの民謡をアレンジしたものも含まれている。たと

えば、歌(11)は、『奴隷のニグロKatibo Nengrej』としてナイマンもレパートリーに加えており、彼のベスト曲としていくつかのCDに収められている。

トレフォッサは、教会や伝道活動で用いられるスラングではなく、はじめて日常的に用いられるスラング語を用いて詩集を発表した人物として知られている。一九五七年に発表した詩集『はじまり[Troji]』は、クーンダースに捧げられているが[Voorhoeve and Lichtveld 1975, p. 196]。これは、トレフォッサがクーンダースの考え方——黒人が自己を黒人として肯定することが重要であるというもの——に共鳴していたことを示している。かれは一九五九年に、スリナム共和国国歌二番のスラング語を作詞している。

ここで重要なのは、「自らの道の主人」になるための具体的な条件として、自分自身の文化を实践することが述べられている点である。これはナックスの活動理念とそのまま重なるものである。

ブレイフェルド氏は、スピーチの締めくくりとして、トレフォッサの詩を引用する。

最後にトレフォッサ氏による詩『たった一瞬… Wan Eukri Gado-Momentu...』を取り上げましょう。氏ご自身が私に話してくれた話です。光栄なことに、この詩がどうやって生

まれたのかを氏が私に話してくれたのです。

氏がヨーロッパで勉強していたとき、パリに行きました。もの凄いい人ごみで、そこらじゅう車だらけでした。氏が道路を渡ろうとしたとき、周りを車に囲まれてしまいました。左を見て右を見ても車だらけです。氏は家に帰ってこの詩を一瞬で書きました。トレフォッサ氏はほんの一瞬の間に書いたそうです。

たった一瞬、それ以上はない、それが私たちの真ん中に収まっている

けれど、その肉は張り詰めている

まるで一〇〇年の間ひとつに締め上げられているかのようにわが母よ、再び私はあなたの名前を呼ばなくてはならない私を護り給え！

私はここに射られた矢

我に災いあれ、もし私が時代の皮を突き抜けることができないのなら

トレフォッサ氏が書いた深遠なこと、「我に災いあれ、もし私が時代の皮を突き抜けてくることができないのであれば」ということ。これはつまり、私が働かないのであれば、私が何もしないのであれば、その人（責任のある者）は私なのです。もしあなたに何かをする機会があるとき、汝に災いあれ……もし汝が時代の皮を突き抜けて来ることができないのであれば。

こうした締めのことばには、機会があるにもかかわらず自分から行動しようとしないう黒人への喚起が込められている。

スピーチが終わり、歌や詩の朗読が済んだ後、ブレイフェルド氏は再び壇上に現われて、神への祈りと祖先への感謝のことばを主導する（18）。

ガド、アナナ、ウイタタ、今日の朝、我々はあなたの前に来た。

七月一日の朝、我々は一三八年間を思い出している。我々の祖先のように我々は自由になった。

今日我々はここに立ち、あなたが我々に与えた祖先に感謝する。

経験しなければならなかった奴隷制を生き抜いた祖先に。

暗黒の生活の中であきらめなかった祖先に。

他の者がやったこと（奴隷制）ために、自分たちの望みどおり自らの道を作る機会がなかった我々の祖先に。

一三八年目の今日、我々の国には自由があり、我々は自由人である。

ウイタタ、アナナはそのありがたみを我々に教えている。

我々に力を与えてくれている。我々の道の主は我々自身であるということを示してくれている。……

ここである「自由」が括弧付きのものであること、すなわち現状はむしろ不自由であることは言うまでもない。それを克服するためにタクタンギの開催が必要なのである。今日の「我々が自由である」ということばは、むしろ理想的なものであり、文字通りの「祈り」と解釈すべきであろう。

三、理想像としての多文化主義的同一性

タクタンギにおいて顕著なことは、かれらが自らの現状を否定的に捉えていること、そしてそれを克服するための理想的な自己像として「アフリカ系スリナム人」という多文化主義的同一性——スリナムを構成する複数の集団の一つという在り方——が掲げられていることである。

ナックスのパンフレットの表紙に掲げられたスローガン「白人の椅子に座ってニグロの座椅子を売るな」というオドと、そのオランダ語訳である「ルーツを捨てるな」ということばを思い出してほしい。このオドは、裏を返せば、自らの文化的背景を捨てて白人文化を取り入れる人々が黒人の間に多いことを示している。また、タクタンギのテーマ『あなたの道の主はあなた自身である』があえて掲げられる背景には、「白人」の見方にしたがって自らの文化が軽視され、祖先への感謝が忘れられてしまっている現実、いいかえれば、黒人の多くが「白人」を「主人」として想定して

しまう状況、黒人が「主人たる白人」に「自分自身の道」を奪われてきた、そして現在も奪われつづけている奴隷的存在だという認識がある。こうした自己理解は、デュボイスの「二重意識」——「絶えず自己を白人という「他者の目」によって見るという感覚」[デュボイス 1992, p. 15]——と同型のものといえる。

ナックスの理事長は、黒人は西洋文化の影響を強く受けすぎており、そのためいつそう「文化とアイデンティティ」、つまり「アフリカ系スリナム文化」と「アフリカ系スリナム人のアイデンティティ」を保持しなければならないと語っている。これは、いかなれば、黒人の現状が一つの欠如と捉えられているということである。自らの祖先と伝統文化を評価する姿勢の欠如、自己評価や自尊心の欠如である。こうした否定的なあり方を脱却するために組織されるのがナックスの活動なのであり、タクタンギというイベントなのである。タクタンギは、そうした欠如を満たすための儀礼であり、それが「ニグロ」から「アフリカ系スリナム人」へのシフトになって現れている。

多文化主義に依拠することで自己に備わる植民地主義を克服しようとする試みは、二〇〇二年七月四日付のデ・ワール・タイド紙『子供新聞Kinderkrant』に掲載された、オードリーという少女によるイラストにも端的に表現されている(図2)。そこには、喝采の中でコトミスイが奴隷の鎖を

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティー（岩田）

取り去っている様子——「ケティコティ」——が描かれている。すでに述べたように、コトミスイは、典型的な「アフリカ系スリナム文化」であり、多文化主義的な黒人像の象徴といえる。彼女が奴隷の鎖——植民地主義の象徴——を解くこと、これは、多文化主義による植民地主義の解放にほかならない。

「アフリカ系スリナム人」は、アフリカに起源を持つスリナム人、アフリカ出自のスリナム人である。クレオールとマルーンという区別は、このままとまりの内的差異となる。「アフリカ系スリナム人」というあり方は、一国家というまとまりとそれを構成する諸民族という秩序、つまり多文化主義的社会観を基盤にしている。スリナム共和国の構成集団は、インディオと「世界の各地」からスリナムに來た諸民族である。「アフリカ系スリナム人」は、アフリカ出自を持つ集団として、多くの民族が共存する多文化主義国家スリナム共和国の一面を占めている。地域という起源によってスリナム社会全体を弁別する図式に則った自己表象はスリナム社会で広く受け入れられている。インド人やジャワ人、中国人もそれに従うからである。

ただし、それがもう一つの体系——黒人一般を全体とするディアスポラ的なもの——とも結合していることを見落としてはならない。ブレイフェルト氏のスピーチでは、アフリカの西海岸が「我々アフリカ系スリナム人」のルーツ

図2

二〇〇二年七月四日付のデ・ワール・タイド紙『子供新聞』に掲載されたイラスト



Karyodikromo Audrey 4B

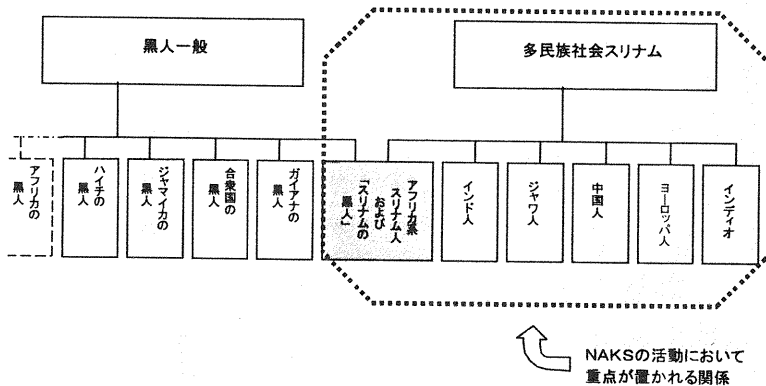
として言及されるし、「アフリカ人」の国連事務総長K・ア
 ナンのみならず、マルコムX、L・ファラカン、W・ヒュー
 ストン、B・マリーリーといった北米・カリブ海地域の有名
 な黒人の名が「アフリカ系スリナム人」の仲間として挙げ
 られる。また、数年前までナックスには「アフリカ舞踊」
 のコースが設けられていた。

こうしたブラック・ディアスポラの位置づけは、「アフリ
 カ系スリナム人」という範疇が「アフリカを起源として世
 界各地に広がる黒人の中のスリナム人」という範疇とも関
 係していることを示している。すなわち、「アフリカ系スリ
 ナム人」という範疇は、「多民族社会スリナム」という多文
 化主義的な体系の一部としてだけではなく、「黒人一般」と
 いうディアスポラ的な体系の一部でもある。この範疇は、
 二つの体系の結合点となっている(図3)。

四、クレオール中心主義

現状としての植民地主義的在り方を克服するためにこう
 した多文化主義的同一性が持ち出されることから、
 「ニグロ」から「アフリカ系アメリカ人」へという、合衆国黒人
 の間に見られたシフトが思い出されよう。しかしスリナム
 の場合、ナックスの活動に見られる同一性上のシフトは、

図3 二つの体系の結節点としての「アフリカ系スリナム人」



スリナムの黒人に特有な事情——クレオールとマルーンの区別——によって、複雑な様相を示している。

前述のように、「アフリカ系スリナム人」にはクレオールもマルーンも含まれる。事実、ナックスの活動ではマルーンの文化要素(旗や歌)も用いられている。タクタンギでは「アフリカ系スリナム人」と同義語的に「黒い肌(を持つ者)」という言い回しが繰り返し用いられる。

スリナムでは、クレオールよりもマルーンの方がより「純血」的であるといわれており、事実マルーンには肌の色が黒い人が多い。そうしてみると、「黒い肌(を持つ者)」としての「アフリカ系スリナム人」には、クレオールよりもむしろマルーンの方が当てはまることになる。

しかし実際にナックスの活動では、クレオールが中心的役割を果たし、また「アフリカ系スリナム文化」として取り上げられるものにはクレオールのもの——スラナン語、コトやアニサの服飾など——が圧倒的に多い。すなわち、ナックスにとつての「アフリカ系スリナム人」は事実上クレオールのことを指し、その活動には、クレオールが「アフリカ系スリナム人」を代表・表象するという、クレオール中心主義が見られるのである。

こうしたクレオール中心主義を可能にする背景として以下の三点を挙げることができる。第一が、人口・政治力・

経済力などの面で、マルーンよりもクレオールが優勢だという社会事情である。端的にいえば、クレオールはマジョリティを形成している。

第二の背景は、植民地支配で生じた「文化の剥奪」である。ナックスの活動の中心となる文化要素はいずれもスリナムで生まれたものである。このことは「インド人の文化」がインド世界(とくにヒンドウー的なもの)に、「ジャワ人の文化」がインドネシアに求められることと対照的である。「アフリカ系スリナム人」のルーツがアフリカにあるにもかかわらず、そこに戻ることができないということを、理事長は次のように語っている。

我々のルーツはスリナムからはじまるのです。それはちょうど袋小路のようなものです。ファミリー・ツリーは作れません。元々の名前も宗教も白人に取られてしまったからです。

ルーツがアフリカから分断された後の土地、奴隷として生き抜いた土地スリナムにある理由を理事長は、ルーツからのつながりを示すものが奴隷制の中で白人に剥奪されたという歴史的事実に求めている。現在からさかのぼると、直線的・連続的なつながりはスリナムの奴隷制——分断後の歴史的空間——にまでしか求められないというのである。ある意味、皮肉といえれば皮肉である。植民地主義的自己像

を乗り越えて自分たちを評価するために必要な「ルーツ」が、すでに植民地にあるからである。

黒人と比べて、インド人などの他民族が「インド系スリナム人」や「ジャワ系スリナム人」などと自称することはほとんどない。「…系スリナム人」という名称の使用は黒人の専売特許である、とても言いたくなるほどである。こうした状況は、第一に、黒人が分断後の歴史的空間に依拠せざるをえないことから生まれているのであろう。黒人は、「スリナム」との結びつきをあえて強調しなくてはならないのである。

最後に、多文化主義と植民地主義との間のバランスを取る試みを挙げたい。理論的に考えれば、分断があつたとしても、アフリカとのつながりを強調することは可能であろう。黒人男性の晴れ着として「アフリカの衣装」が好まれることもある。また、もっと頻繁に「アフリカの音楽」を演奏したり「アフリカの衣装」を利用することによって、「ルーツ」とのつながりを強調できるはずである。しかし現実はその逆である。「アフリカ」は重視されず、その代わりに分断後が集中的に表象されている。

スリナム社会において多文化主義的同一性は、意識的か否かにかかわらず、強く指示されている。インド人やジャワ人など、ほとんどの民族がそれに依拠しているからであ

る。黒人の場合、地域起源にもとづく多文化主義は、「アフリカ」とのつながりを前提とするものであり、これに従えば、クレオールよりもマルーンがその担い手に適している。クレオールもマルーンも、奴隷の子孫として同じ「分断」を経験しているが、マルーンの方が西洋の影響を受けず、より純粋な「アフリカ文化」を保持していると見なされているからである。いいかえれば、マルーンにとつての「分断」は、クレオールのそれよりも小さく、より「起源」に近いのである。

しかし、都市部で生きるクレオールにとつて、自分たちは西洋的な意味で「洗練」された「文明的」・「近代的」な人々であり、それに比べマルーンは「未開」で「野蛮」な人々である。そのため、マルーンが軽蔑の対象とされ、マルーンと同一視されることを多くのクレオールが嫌う。つまりクレオールは、マルーンを自分たちから切り離さなければならぬ。

その一方で、スリナム社会で広く支持されている、地域を起源とする多文化主義も受け入れる必要がある。マルーンから自分たちを弁別しつつ、「アフリカ」というルーツとのつながりを維持したい、つまり、「未開でも野蛮でもないアフリカ系スリナム人」のエスニシティを示したいのである。分断後という過去を強調することは、意地悪く言えば、「遅

れたマルーン」から一線を画しつつ多文化主義に依拠するという試みの現われなのである。分断後の強調によって、「アフリカ」というルーツとのつながりを保持したまま、マルーンとの距離を示すことができる。「アフリカ人」ではなく「アフリカ系スリナム人」という名称が優先される背景には、「アフリカ」とのこうした不連続的つながりがあるのであろう。

このように、クレオール中心主義的な「アフリカ系スリナム人」という同一性は、多文化主義に基づくにもかかわらず、二つの意味で植民地主義的な性格も伴っている。第一に、クレオール文明とマルーン未開という植民地主義的な二項対立を内包していること、第二に、自らのルーツとして求められる場が植民地時代の社会そのものにあることである。奴隷的な同一性を克服して「自由」になるために求められるものが、実は植民地主義を前提にしているという、一見逆説的な様子がみられるのである。

五、結びにかえて

ナックスの活動からは、植民地主義的な否定的自己像の克服、つまり自らを「自由」にするために、「アフリカ系スリナム人」という理想的自己像が持ち出されていることがわかる。「アフリカ系スリナム人」という範疇は、多文化主義的な範疇とディアスポラの範疇の結節点をなしている

が、「自由」になるために求められるのは、むしろ多文化主義的在り方である。

奴隷制や植民地支配によってこうした自己疎外が生じているのは、カリブ海地域において珍しいことではない。たとえば海老坂は次のように言っている。「今日のマルチニック人の背後には二世紀にわたる奴隷制と、一世紀以上にわたる植民地的同化の歴史がある」〔海老坂 一九八六、七二頁〕。それを通して「一方でアフリカ人、インド人としてのアイデンティティは根こそぎにされ、他方であてがわれたフランスのお仕着せは身についていない。これがごく簡単に振り返ってみたときの、アンチル人におけるアイデンティティ喪失の状況である」〔上掲書〕。

植民地主義が生んだ疎外状況を変革するためにF・ファノンとは「人間性」を唱えたのであるが〔ファノン 一九九八〕、スリナムの黒人の間ではむしろ「根こそぎにされたアイデンティティ」の模索が求められている。それは、インド人をはじめとする「根のはったアイデンティティ」を持つ民族が多数派として黒人を取り巻いているという、スリナム特有の事情があるのかもしれない。「アイデンティティ」に関して、近年注目されたフランス領カリブ海地域の作家による動きもスリナムには見られない。

スリナム社会において——「おいても」といふべきであろう——、多文化主義的同一性は「政治的に正しい」とい

える。新聞をはじめとする公的な領域では、黒人に対して「アフリカ系スリナム人」もしくは「クレオール」という名称が用いられる。その一方で、ナックスの試みが示すように、多文化主義的同一性は、あくまでも植民地主義的同一性との関連の中に置かれている。また、クレオール中心主義という観点から論じたように、「アフリカ系スリナム人」という在り方には、植民地主義的な性格が見られる。

けれども、黒人の同一性に見られるこうした在り方を矛盾と捉えるべきではない。タクタンギは、黒人が自己を評価するために組織されているのである。このことを過小評価することはできない。「アフリカ系スリナム人」という同一性が植民地主義的な「現実」を乗り越えるために提示されているということも含めて考えてみると、タクタンギの分析を通じて明らかになった黒人の社会的在り方には、多文化主義的性格と植民地主義的性格の双方が含まれているのである。ナックスの活動は、矛盾というよりも、多文化主義と植民地主義の間に折り合い・妥協点を探る試みと解釈すべきであろう。

「アフリカ系スリナム人」という多文化主義的同一性がフォーマルなものとして使われるべきであるとしても、それにもとづくだけでは、今日スリナムの黒人が生きる社会状況を理解するには不十分である。奴隷の子孫もしくは奴隷のような状態という、植民地主義的在り方はいまだに大きな意

味をもっている。単にケティコティを「アフリカ系スリナム人が奴隷制の廃止を祝う日」と位置づけるだけでは、本稿で示したような「ニグロ」としての黒人の在り方や、多文化主義と植民地主義の緊張関係が見過ごされてしまうのである。

注

- (1) 本稿ではスラナン語が多用されるので、スラナン語の語彙には正書体を、スリナム共和国の公用語であるオランダ語の語彙には斜体を当てることにする(ただし固有名詞は正書体とする)。
- (2) 「ケティコティの日」は単に「奴隷解放日Mansipasi-Dei」と呼ばれることもある。
- (3) 一九七五年までオランダの植民地であったスリナムには、イングリンド人の入植がはじまった一七世紀中頃から奴隷労働力の輸入が禁止された一八二〇年までの間に、総計約二二万五〇〇〇人のアフリカ人奴隷が連れてこられた[Stipriaan 1994, pp. 184]。奴隷制が廃止された一八六三年前後の奴隷人口は、三万人ほどであった[Emmer 1980, pp. 88-89]。
- (4) スリナムで「クレオール」と呼ばれる人々には、たしかに「混血」とも呼びうる者が少なからず含まれるが、「クレオール」はまず第一に「黒人」を意味する。
- (5) スリナムでは一九八〇年以降国勢調査が行なわれていないものの、一九九七年にスリナム共和国統計局が首都圏——首都パラマリボとそれを取り囲むワニカ郡——の住民を対象に

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティ (岩田)

世帯調査を行なっている。首都圏には、同国総人口約四〇万人の六、七割(二五万九七六一人)が居住する。その調査結果によれば、首都圏人口の民族別構成は多いものから順に、インド人Hindustaan:八万二七一人(三二%)、クレオールCreool:八万〇四七一人(三二%)、ジャワ人Javans:四万三八三四人(一七%)、マルーンmaron(いわゆるブッシュニグロ、統計調査では「森林クレオールBoslandcreool」):一万六五四二人(六%)、ミックスGemengd:一万四四三二人(六%)、中国人Chinees:六二六一人(二%)、アメリカ先住民Indiam:六〇〇三人(二%)、その他(白人Kaukasischを含む):九九四七人(三%)というものになっている。〔Ardeeling Huishoudonderzoeken 1998〕。

(6) 本稿は、二〇〇三年度一月に立教大学文学研究科地理学専攻博士課程後期に提出した学位申請論文『スリナム共和国都市部における「アフロ・スリナム人」とその他の黒人エスニシティ』の一部に加筆修正を加えたものである。同論文を作成するに当たって、同大学文学部小西正捷教授(主査、現・名誉教授)と豊田由貴夫教授(副査)には大変お世話になった。記して感謝したい。

(7) 座椅子は、ウインティ信仰——黒人の中で継承されてきた信仰体系(本文中で後述する)——において魂の宿る場所として、儀礼的に重要な位置付けにある。また、座椅子を元にした楽器クワ(クワ)・バンギkwa (kwa) bangi は、同信仰の音楽だけではなく、世俗的な黒人音楽でも打楽器として重要な役割を担っている。

(8) 実際には、クレオールかマルーンかに簡単に分類できない黒人が多い。こうした状況においてクレオールとマルーンの

区別が持つ意味については、また別の機会に詳しく論じたい。(9) ナックスの活動をはじめとする黒人の文化イベントで興味深いのは、男性に比べて女性の参加者が圧倒的に多いことである。たとえば黒人のミスコンテストも、男性よりもむしろ女性に人気がある。黒人のミスコンテストについては、〔岩田、二〇〇四〕で若干の考察を試みているが、黒人のエスニシティとジェンダーの関わりについては、今後さらに分析を深める必要がある。

(10) 挨拶、歌詞やスピーチなど、以下のスラナン語の聞き取りおよび翻訳は、スラナン語のネイティブスピーカーと協同で進めた。引用中のカッコは、全て筆者による補足的説明である。

(11) スリナム共和国国歌は、一番がオランダ語、二番がスラナン語という構成になっているが、今日スリナムで耳にするのは、二番の方が圧倒的に多い。この背景には、黒人の文化とされるものの多くが、しばしばそれと同時に「スリナムの国民文化」ともみなされるという事情がある〔岩田 二〇〇三〕。

(12) 二〇〇〇年一〇月一日付のデ・ワレ・タイド紙の文芸欄で、ジャモワゾー/コンフィアンの『クレオールとは何か』『ジャモワゾー/コンフィアン 一九九五』が「アンティール文学」として紹介された。しかし、同書に掲載されたカリブ・インディアン神話の一部が概訳されたのみで、同書は単にインディオラの語りを文学として記録・保存するものと捉えられていた。そこでは、アンチオーブが言うような、自分自身を確立するために「アイデンティティ」「アンチオーブ・他 一九九七」を西洋に対して対置させるという、これらの切実な試みは問題になっていない。

参考文献

Afdeling Huishoudonderzoeken

1998 *Huishoudens in Suriname*. Algemeen Bureau voor de Statistiek, Paramaribo.

Breeveld, H.

2000 *Jobie Pengel: 1916-1970*. Uitgeverij Conserve, Schoorl.

Emmer, P.C.

1980 Anti-Slavery and the Dutch Abolition Without Reform. In P.C. Emmer (ed.), *The Dutch in the Atlantic Economy, 1580-1880: Trade, Slavery and Emancipation*. Leyden Centre for the History of European Expansion, Leiden.

NAKS Organisatie voor Gemeenschapswerk

2001 NAKS Organisatie voor Gemeenschapswerk Sinds 1947; No Sidon na Bakra Sturu fu Seri Yu Nengre Oso Bangi (leaflet).

Stipriaan, A. van

1994 Een Culturele Januskop: Afro-Surinaamse Emicetontwikkeling Tijdens de Slavernij, Oso(2)13.

Voorhoeve, J. and U. M. Lichtveld

1975 *Creole Drum: an Anthology of Creole Literature in Suriname* (trans. by V. A. February). Yale University Press, New Haven and London.

アンチオープ、G.／浜邦彦／鈴木慎一郎

一九九七 「歴史とクレオール」『現代思想』二五卷一一号。

岩田晋典

二〇〇三 『スリナム共和国都市部における「アフロ・スリナム人」とその他の黒人エスニシティ』立教大学文学研究科地理学専攻博士号学位申請論文。

二〇〇四 「能動的な自己を示すために——スリナム社会の黒人女性と多文化主義——」二〇〇三年度立教大学

学術推進特別重点資金単独研究科プロジェクト研究・研究報告書『生活世界から捉えるグローバル／ローカル化の動態に関する地域間比較研究』二二五——三七頁。

海老坂武

一九八六 『雑種文化のアイデンティティ 林達夫、鶴見俊輔を読む』みずず書房。

シャモワゾー、P.／R. コンフィアン

一九九五 『クレオールとは何か』(西谷修訳)、平凡社。

デュボイス、W. E. B.

一九九二 『黒人のたましい』(木島始・他訳)、岩波書店。

フannon、F.

一九九八 『黒い皮膚・白い仮面』(海老坂武・加藤晴久訳)、みずず書房。

(明海大学非常勤講師)

Black ethnicity and Emancipation Day in Suriname: on the activities and self-recognition of the cultural organization NAKS

by IWATA, Shinsuke

スリナム奴隷解放記念日における黒人のエスニシティ
(岩田)

In Suriname, slavery was abolished on July 1 in 1863. This day is called Ketikoti-Dei which means Chainbreaking-Day in the Sranan language, and it is now one of the national holidays of Republic of Suriname. Many events, including festivals, concerts and bargain sales, are held on this day. Tak' Tangi (talk-thank) is one such event, and is organized annually by NAKS, a cultural association aiming at establishing an "Afro-Surinamese" identity. This identity is based on multi-culturalism which is prevalent in Surinamese society and is looked at as the most politically correct ideology.

This paper examines the ethnicity of Surinamese blacks and their self-recognition by focusing on Tak' Tangi of NAKS. Tak' Tangi represents the goal of NAKS's activities, namely the self-affirmation of Surinamese Blacks as Afro-Surinamese. For NAKS, Tak' Tangi is an opportunity for the descendants of slaves to express gratitude to their ancestors who survived slavery, and this shall be accomplished by practicing the cultural "heritage", such as the Sranan language, music, etc. Both, expressing gratitude and practicing tradition, allow Blacks to overcome the "actual" colonialistic self-identity of "Negro" and achieve the idealized multi-cultural "Afro-Surinamese" self-identity.

On the other hand, a closer look at the event will reveal that the activity is oriented toward multi-culturalism, but that colonialistic features can also be found: NAKS is based largely on Creole-centrism against Maroons and traces the "roots" of Afro-Surinamese to colonial situation instead of "Africa". From this view point, one might consider NAKS's activities inconsistent, but they should still be recognized as an attempt to balance two confronting ideologies and achieve self-affirmation.